

基本情報：

11737020 / 生産デザイン学科 テキスタイルデザイン専攻 / 3年 / 鹿野里美  
 8月16日-10月29日 / オスロ国立芸術大学(Fashion design and Costume design)

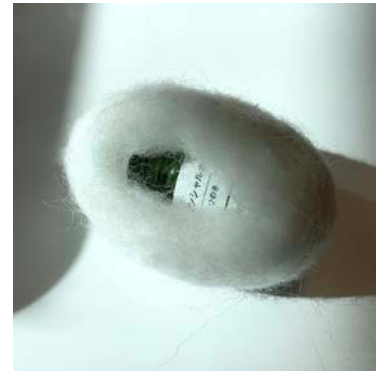
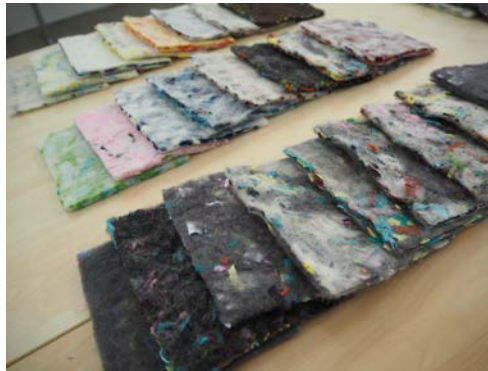
基本情報：

個人制作 - ウールを用いた作品制作  
 グループワーク - 3人グループに分かれてウールについてのディスカッションやリサーチを行う  
 1dayワークショップ(BA1&BA2) - "dissolve & new beginning"をテーマに一年生と二年生が共同で衣服を作り上げるワークショップ

制作したものについて：

グループでは「ウールグリース」と呼ばれるラノリンについてリサーチを行った。本来ウールを製品に用いる場合には、本来持つラノリンは汚れと共に洗い流されてほとんど残っていない。しかしウールにはラノリンがあってこそ、保温性や撥水性を最大限生かすことができる。そこで私はウール本来の持つ香りやラノリンを含んだ羊毛のテクスチャーを五感で感じることができるような緩衝剤を制作した。

個人制作としては、廃棄された布とウールを組み合わせた「水の消費を行わないテキスタイル」を制作した。通常テキスタイルは様々な色彩に染める際に大量の水を使用する。そしてそのように大量に水を消費したテキスタイルも過剰に生産され、様々な形で消費されているのが現状だ。テキスタイルデザインを学んでいる身として、この問題は決して目を逸らしてはいけぬ事実であると私は考えている。このテキスタイルに深く関わる問題を“消費者”にも生産者にも身近に感じてもらうには、問題提起であるこの製品も魅力的でないといけぬ。そこで作品制作を行う際に「環境に低負荷でありながらも魅力的な作品にするにはどのようにしたら良いのか」を第一に考えていた。作品は3層構造になっており、豊かな色彩を再現するために細かく裁断した布をウールで挟み込んでいる。その3層をニードルフェルティングの技法を用いて成形することによって、水を消費せずにカラフルなテキスタイルを制作することができる。製作の際には実際に手芸店で購入した端切れや、ワークショップの際に余った布を用いて制作を行った。



全体の感想：

ノルウェーは日本に比べて環境問題への意識が高いと感じている。スーパーではペットボトル飲料が倍もしくはそれ以上の値段で売られていたり、食品のパッケージも日本の過剰とも言える包装に比べたらシンプルだと思う。そんな環境だからこそ、テキスタイル製作を取り巻く環境問題を見て見ぬ振りをしてきた自分自身に気がつくことができた。

製作環境が全く違う上に、私自身が英語を用いたコミュニケーションが不得意であったために、とにかく手を動かしてサンプルを製作したり、制作を進める中でリサーチした結果や自分の考えをプレゼンテーションができるデータとして書き起こしたりするなど、「言語を用いずとも目に見える形」で提示し、先生方とディスカッションできるように心がけていた。母国語を使うことができないという慣れない環境だからこそ、サンプルの製作と見直しを繰り返し、満足のいく作品の製作ができたと感じている。2ヶ月強という長い時間の中でここまで集中して素材と向き合って作り上げた経験は今までなかった為、今までいかに作品に向き合えていなかったかを身をもって実感した。ノルウェーでのこれらの経験は作品との向き合い方を見直す、とても良い機会となった。「テキスタイルと環境問題」をテーマにした作品はまだ完成ではない。この先もこのテーマで作品製作を行なっていくつもりだ。

